

# 講義・演習等に関する大学生の満足・不満について

川 端 亮 (光華女子大学)

近年、大学における学生の授業評価もかなり実施されてきているようである。しかしそれが大学の、あるいは個々の教官の授業方法、教育方法の改善、改革につながるには、まだまだ遠い道のりがある。それどころか学生の授業評価から、現在の教育のどのような点に学生が満足し、どのような点に不満なのか、そしてそれは何に由来するものかなどの基本的な認識すらも引き出そうとされていることは少ないようである。本論は、そのための調査分析のひとつの試みである。

## 1. 調査の概要と質問項目

本論で用いるデータは、1995年2月から3月にかけて、京都大学、大阪大学、大阪外語大学の学生658人を対象に行った意識調査にもとづく。とくに大学での講義・演習・実験実習等についての学生の評価を問う質問を中心に分析の結果を述べる。

調査対象となった学生は、男性が182人で27.9%、女性が470人で71.4%であり、学年は、1回生が、368人(55.9%)、2回生が223人(33.9%)、3回生が53人(8.1%)、4回生が14人(2.1%)であった。

授業の評価を問う質問項目は、つぎのものである。

### 1. あなたがこの大学で受けた講義・演習・実験実習についてうかがいます。

- (1-1) この大学であなたが受けた講義や演習等の中で、あなたにとって一番あなたのためになったと思うものは何でしたか？
- (1-2) それはどのような意味であなた自身のためになったと考えていますか？
- (1-3) その講義や演習等の時間、指導や学習の仕方などに何か特徴がありましたか？それは具体的にどんなことですか？
- (1-4) その他にあなた自身のためになったと思う講義や演習等は何でしたか？
- (1-5) それはどのような意味であなた自身のためになったと考えていますか？
- (1-6) その講義や演習等の時間、指導や学習の仕方に何か特徴はありましたか？それは具体的にどんなことですか？
- (1-7) あなたはこの大学での講義や演習等の経験して、大学での教育や指導は今後このようものであってほしい、と思う希望なり注文なりがあれば書いてください。

これらの項目に対して、学生が自由記述の形で回答したものの内容を分析する(1)。

まず、学生が「自分のためになったと思う講義・演習等」の「ためになった」理由として挙げているものを質問項目(1-2)、(1-3)、(1-5)、(1-6)の中から拾い、学生の抱いている満足感が何に由来するかを見てみよう。それらをまず、つぎの5つのカテゴリーに大きく分ける。

- 1 学生達自身にとって有効・適切である
- 2 学問・研究の世界に目覚めることができた
- 3 教官の熱意が感じられ、人柄、話術などが魅力的であった
- 4 学生の自主性・参画意識が満足される形態であった
- 5 よく工夫され準備された講義等であった

その中で、「1 学生達自身にとって有効・適切である」には、学生にとっての有効性、適切さにいくつかの意味合いを持つものが含まれている。それは、自分の興味にぴったり合っているという意味での適切さであったり、

将来の職業やそれに役立つ資格取得にとって有効であるなどである。そこで、このカテゴリーは、つぎの4つのサブカテゴリーに細分化する。

#### 1.1 自分の興味や知的欲求に合う

これは、具体的な回答例としては、「自分の関心にぴったりの講義内容だった」、「興味を持っていたところについて詳しく話してもらえた」などが含まれる。

#### 1.2 自分の将来に役立つ

これには、「将来の資格取得に役立つ」、「自分の将来の可能性が見えてきたような気がする」などが含まれる。

#### 1.3 これまでの自分を振り返りができる

これには、「自分の生き方について考えることができた」、「自分について深く理解できるようになったと思う」などが含まれる。

#### 1.4 自分の实际生活に役立つ

これには、「自分のからだの健康にかかわることを学び取れた」、「日常生活に密接に関係する内容だった」などが含まれる。

つぎの「2 学問・研究の世界に目覚めることができた」から「5 よく工夫され準備された講義等であった」までは、その具体的な回答例を上げて、その内容を確認しておく。「2 学問・研究の世界に目覚めることができた」には、「高校までに勉強した見方を一変させてくれた」、「自分のこれまでの興味・関心の世界からは出てこないものに目を開かれた」、「新聞やテレビなどで騒がれている問題を、理性的に、総合的な視点から考えてみるきっかけになった」、「論理的、体系的思考が習得できた」などが含まれる。つまり、新たな知的世界に意識が広がったり、新たに何かを考えるきっかけになったり、あるいは、自分自身が新たな知的能力を獲得したりするなど、学生たちが講義等を受ける以前に求めていたものとは異なる知的な考え方を習得したことに対する満足感である。そしてこれらは、もちろん教育する側は学問的研究の世界に関する知識を与えているので、学問的研究世界に目が開かれたことへの満足感とまとめることができるであろう。

3番目の「教官の熱意が感じられ、人柄、話術などが魅力的であった」には、「教官の真剣さが伝わってきた」、「手抜きが無く、毎回緊張したものであった」、「尊敬できる教官との出会いを持つことができた」などの熱意、人柄による満足と「話術が巧みであるという間に時間が過ぎる」、「話しがおもしろい」という話し方にみせられるものがある。さらに「おしゃれで感じがよい」、「知的なスマートさが感じられる」などの個人的な特性までもが学生の満足の源として含まれている。

4番目の「学生の自主性・参画意識が満足される形態であった」には、少人数で学生が発言する機会を与えられている授業形態に対して、満足感を述べているものである。具体的には、「少人数の学生に対して、ていねいに教えてもらった」、「学生一人ひとりの顔と名前を覚えてくれていた」、「教官と討論する機会が多くある」などの回答例が含まれる。また、「班ごとの実験してレポートを書いた」、「毎週必ずレポートを出さなくてはならない」などの、学生にとってはその時には負担になるようなことも後になれば自分の学習に有意義であったと感じられている回答も含まれている。

5番目の「よく工夫され準備された講義等であった」には、一般的には、「講義の組み立てに計画性・目的意識が感じられる」、「よく準備された講義であった」というものであるが、「ビデオを使って具体的な映像の形で示してくれる」、「きちんと内容をまとめて板書してくれる」などの具体的な手段、方法も含めたものである。

以上の項目にしたがって、自由回答の内容を分類し、集計したものが、表1である。

学生自身に有効や学問・研究に目覚めるは、半数以上の学生が「ためになった」理由として挙げる反面、教官の熱意や人柄、話術を挙げるものは、1割と少しでもっとも少なく、少人数という授業形態や周到な準備、視聴覚施設を用いるなどの方法的な工夫も2割強と決して多くはないことは、注目されるべき点であろう。

つぎに学生が授業に対して失望感や不満を持った理由を調べてみる。質問は、先に掲げた1-7である。さまざまな注文が述べられている中で、調査対象者が、1, 2回生が多いこともあって、カリキュラムの編成についての注文、とくにもっと自分が興味を持っている科目、専門科目などを履修したいという希望、一般教育科目に興味をもてない不満がみられるが、ここでは大学での教育、指導にかかわる一般的な問題を取り上げる。それらをまとめる

表1 講義・演習等の「ためになった」理由

	度数	(%)	
1 学生自身に有効	372	68.0	有効ケース数547
1.1 自分の興味や知的欲求に合う	163	29.8	
1.2 自分の将来に役立つ	94	17.2	
1.3 これまでの自分を振り返りができる	79	14.4	
1.4 自分の實際生活に役立つ	163	29.8	
2 学問・研究に目覚める	291	53.2	有効ケース数547
3 教官の人柄がよい	78	14.3	有効ケース数547
4 学生の参画意識が満たされる	110	20.1	有効ケース数547
5 よく準備・工夫されている	143	26.1	有効ケース数547

と、「9 教官に対する不満」と一括りにできる。そのなかでも「研究者である前に教師であってほしい」、「見下ろすような態度をしないでほしい」、「学生がどんどん偉い先生のところへ出入りできるような雰囲気になってほしい」、「時間的にルーズである」、「融通のききすぎる教官と融通のまったくきかない教官がいる」などの教官の個人的な人間的側面、あるいは教官と学生の人間関係における側面などが指摘されている。これらをまとめて「9.1 人間・人間関係における不満」とする。その他、「ひたすら先生が読みしゃべるだけ」、「もっと学生の反応を見ながら講義してほしい」、「基礎的な用語については解説して使ってほしい」、「みんなにわかる言葉遣いをしてほしい」などの不満が挙げられる。これを「9.2 講義等における不満」とまとめることにする。その集計結果は、表2の通りである。

表2 講義・演習等に対する不満

	度数	(%)	
9 教官に対する不満	200	46.6	有効ケース数429
9.1 人間・人間関係における不満	59	13.8	
9.2 講義等における不満	153	35.7	

回答した学生の中では、半数近くの学生が何らかの不満を挙げているが、注意すべき点は、有効ケース数が429と、先の「ためになった」理由を尋ねた場合の547よりも少ないことである。授業に対する希望や注文を書かなかった学生がかなりの数を占め、これが無回答なのか特になんかという意味であるのかは判別できない。547をもととすれば教官に対する不満を述べたものは、36.6%、全体の658を基準とすると、その割合は、30.4%となる。いずれにしても少なくとも3割以上の学生が不満を持っていると考えられる。

## 2. 満足・不満と学年、性別の関連

以上見てきた講義・演習等に対する満足、不満の集計を学年や性別の観点から集計し直してみよう。このような満足、不満に対して影響を与える要因として、すぐに考えられるのが何回生であるかという学年の影響である。そこで、学年ごとの満足、不満を調べてみる。学年は、1回生、2回生、3回生以上の3つにわけた。その結果が、表3である。

学生が、自分にとって有効で適切であると思った人は、1回生、2回生、3回生と学年を経るにしたがって減少する傾向が見られる。しかし、1.1 から1.4 までのすべての項目で同じ傾向が見られるわけではない。1.2 の自分の将来に役立つや1.3 のこれまでの自分の振り返りができるなどは、学年による特徴は見られない。もっとも特徴的なのは、1.4 の自分の實際生活に役立つで、1、2回生においては、およそ3割を占めるのに対し、3回生以上

表3 学年と満足・不満

度 数 ( % )	1 回生	2 回生	3 回生以上	有意水準
1 学生自身に有効	218 (70.6)	117 (67.2)	37 (57.8)	* * <0.01
1.1自分の興味や知的欲求に合う	84 (27.2)	57 (32.8)	22 (34.4)	
1.2自分の将来に役立つ	57 (18.4)	26 (14.9)	11 (17.2)	
1.3これまでの自分を振り返りができる	43 (13.9)	27 (15.5)	9 (14.1)	
1.4自分の實際生活に役立つ	103 (33.3)	55 (31.6)	5 ( 7.8)	* *
2 学問・研究に目覚める	159 (51.5)	89 (51.1)	43 (67.2)	
3 教官の人柄がよい	41 (13.3)	22 (12.6)	15 (23.4)	
4 学生の参画意識が満たされる	47 (15.2)	28 (16.1)	35 (54.7)	* *
5 よく準備・工夫されている	77 (24.9)	41 (23.6)	25 (39.1)	*
9 教官に対する不満	107 (45.5)	64 (45.7)	29 (53.7)	
9.1 人間・人間関係における不満	29 (12.3)	21 (15.0)	9 (16.7)	
9.2 講義等における不満	83 (35.3)	49 (35.0)	21 (38.9)	
注 1 から 5 まで	1 回生 309人、	2 回生 174人、	3 回生以上 64人	
9	1 回生 235人、	2 回生 140人、	3 回生以上 54人	

では1割にも満たないという大きな差が見られる。これは1、2回生で多く履修する教養的な科目が、自分の健康に役立ったり、海外旅行をするときに語学が役立ったりするといった意味で、役立つと判断されたのであろう。この1.4とは反対に1.1の自分の興味や知的欲求に合うと答えた人は、学年を経るにしたがって増える傾向にある。つまり学生の思っている自分の興味や知的欲求は、専門的学問に対する興味や欲求であり、その欲求が上回生になるほど多く履修することができる専門科目を学ぶことで満たされる傾向にあると考えられる。

これと同じ傾向にあるのが、2の学問・研究に目覚めるである。1、2回生でもすでに半数のものが学問、研究の世界にふれることに対する満足を披瀝しているが、3回生以上になるとその割合が3分の2にまで高まる。これは1とは異なり、自分がすでに持っていた興味とは異なる、あるいはそれ以上の学問の世界を新たに知ったことへの満足であり、ここにも専門的科目が、学生に与える新たな知的刺激という役割を果たしている点を見ることができよう。

3から5までの教官の人柄、参画意識、準備・工夫は、どれも3回生になると増加する傾向にある。その傾向が

もっとも顕著に現れているのが、4の学生の参画意識が満たされるである。1、2回生では1割強の人しかこの満足を述べないが、3回生以上になると、およそ半数の人がこの点を挙げる。これは主に少人数形式の授業によって、教官と学生の間で一方通行ではないコミュニケーションを伴う教育が行われることによって生じるものである。またそのような形態によって教官の人柄も評価の対象となるのであろうし、講義の組み立てや計画も学生によく伝わるのではないだろうか。このような少人数の授業形態がもたらすメリットは、現行の大学教育制度の中では圧倒的に3回生以上により多く享受されることになる。このことからこの結果は妥当なものであるといえる。

教官に対する不満については、学年による違いはあまり見られず、教育内容や授業形態から考えられるものではないようである。

つぎに男女の性別の点から集計し直してみる。

性別により差が見られる項目はあまり多くない。明瞭な傾向の1つは、1.2の自分の将来に役立つと答えたもの

表4 性別と満足・不満

度数 (%)	男性	女性	有意水準
1 学生自身に有効	108 (72.0)	263 (67.1)	* <0.05 * * <0.01
1.1 自分の興味や知的欲求に合う	41 (27.0)	121 (30.9)	
1.2 自分の将来に役立つ	37 (24.7)	56 (14.3)	* *
1.3 これまでの自分を振り返りができる	22 (14.7)	57 (14.5)	
1.4 自分の実際生活に役立つ	43 (28.7)	119 (30.4)	
2 学問・研究に目覚める	65 (43.3)	224 (57.1)	* *
3 教官の人柄がよい	21 (14.0)	56 (14.3)	
4 学生の参画意識が満たされる	28 (18.7)	82 (20.9)	
5 よく準備・工夫されている	39 (26.0)	104 (26.5)	
9 教官に対する不満	54 (45.8)	145 (47.2)	
9.1 人間・人間関係における不満	23 (19.5)	35 (11.4)	*
9.2 講義等における不満	34 (28.8)	119 (38.8)	
注 1から5まで	男性 150人、女性 392人		
9	男性 118人、女性 307人		

に男性が多く、2の学問・研究に目覚めると答えたものに女性が多いことである。男性の方が将来像が明確で、求める教育内容について認識し、それに比べて女性の方が柔軟に新しい学問、知識に興味を示すのであろうか。

また、教官に対する不満については、教官の人格、教官と学生の間関係に対しての不満を述べるものは男性に多く、講義の方法などについて不満を述べるものは女性が多い。このように男女が反対の傾向を示す点も興味深い。

### 3. 生き方意識との関連

さて、つぎに講義・演習等に関する満足、不満を違う角度から分析してみよう。大学生ともなればそれぞれの生き方に関する意識も差異が見られ始めるであろう。将来の可能性を信じ、目的をしっかりと持ってそれに向かって努力する生き方を求めるものもあれば、その日その日を楽しく過ごすことしか考えないものもいるであろう。もちろん学生という社会経験を持たないものは、その生き方に対する意識も理想主義的であったり、確固としたものではないかも知れないし、すでにある程度形成されているのであるのかも知れない。いずれにしても彼らの生き方意識を調べ、それらと満足、不満の関連を調べてみることも意義があるかも知れない。そこでまず、生き方意識を調べてみる。

生き方意識を問う質問項目は、以下の30項目である。

表5 生き方意識に関する質問項目

あなたが普段お考えのことについてうかがいます。

次の30項目について、[はい・いいえ・?]の中から1つを選んで丸印をつけてください。なお〈はい〉〈いいえ〉〈?〉は、おおむね次のような意味を持つものとします。

〈はい〉：だいたいその通りです（そう思います）。

〈いいえ〉：そうではありません（そうは思いません）。

〈?〉：そういうことは、あまり考えたことがありません（よくわかりません）。

1. わたしは、いろいろと不満なところや反省すべきところがないわけではないが、基本的には、今のままの自分でいい、と思っています。
2. わたしは、自分のことを、いつでも自分勝手なことばかり考える何て自分本位の人間なんだろう、と思うことがあります。
3. わたしは、自分自身の人生において、どうしてもやり遂げなくてはならない自分なりの仕事なり使命がある、という気がしています。
4. わたしは、何とかして自分の大きな可能性を見つけ、その現実に向かっての努力をし、大きく花を咲かせなくては、と考えています。
5. わたしは、人間はだれもいつかは死んでしまうのだから、頑張っても努力してみても結局は無駄だ、という気がしています。
6. わたしは、細かいことでは今までいろいろあったにせよ、基本的には、良い機会や条件に恵まれてきた幸せな人間だ、と思っています。
7. わたしは、人間はだれも、結局のところは自分のことしか考えようとしない利己的な存在だ、という気がします。
8. わたしは、自分自身の将来には大きな可能性が潜んでおり、その内に思いがけないチャンスに恵まれて、それが現実のものになる、という気がしています。
9. わたしは、その時その場で自分なりに精一杯の努力をしていけば、最終的には必ず大きな成果が得られるに違いない、と考えています。

10. わたしは、頑張っって節約して財産ができたとしても、結局は元気な間しかそれを使って楽しめないのだから、あまり先のことばかり考えないで、楽しめる時に精一杯楽しんでおかななくては損だ、と思います。
11. わたしは、この世に一人の人間として生れてきたことを有難く思い、感謝の気持ちに満たされることがあります。
12. わたしは、自分の意見に反対されたり、自分の考えと違う主張をぶつけられたりすると、我慢できなくて、感情的になってしまいます。
13. わたしは、今までと違う新しいことに、いつでもチャレンジし、自分の可能性を広げていきたい、と考えています。
14. わたしは、世間的な意味で成功するかどうかより、その時その場で精一杯頑張ったかどうかの方がずっと大事だ、と考えています。
15. わたしは、世間の人はすぐにキレイゴトを言いたがるけれど、結局はだれもが、お金と快楽と名誉を求めているだけだ、と思います。
16. わたしは、毎日の生活が、どうしてこんなに変わりばえも新鮮さもない灰色のつまらないものなんだろう、と嫌になることがあります。
17. わたしは、自分自身のことは考えに入れないで計画したり行動したりしないと、結局はうまくいかないもの、という気がします。
18. わたしは、どんなにささやかなことでもいいから他の人の役に立つことを見つけ、責任を持ってやっていかなくては、と考えています。
19. わたしは、どんなに小さなことでもいいから、これは自分がやったことだ、と言えるものを持ちたい、と思っています。
20. わたしは、人間の一生は結局のところ偶然の積み重ねであって、努力した善人が泣きを見たり、勝手なことばかりやってきた悪人が最後に笑うことになっても、不思議ではない、と思っています。
21. わたしは、周囲の人たちに支えていただいているからこそこんなふうに住生活していけるのだ、と思うことがあります。
22. わたしは、できることなら、義理や体面など一切考えないで、自分が木や石になったつもりでやっていきたい、と思っています。
23. わたしは、この人をこそ自分のお手本にして生きていきたいと思う人（今の人も昔の人も、また日本の人も他の国の人でもよい）を持っています。
24. わたしは、自分は弱い存在だから、あまり無理をしないで、自分自身と上手に付き合いながら、マイペースで少しずつやっていくしかない、と考えています。
25. わたしは、自分が存在し生きていくことには、全く何の目的も意味もない、という気がしています。
26. わたしは、大自然の力（あるいは神様、仏様、など）によって支えられ生かされているのだから、つまらぬことで一喜一憂しないで、安心しておまかせしておけばよい、と思っています。
27. わたしは、結局は「自分」などというものはない、幻影のような「自分」にこだわるのはくだらないことだ、という気がしています。
28. わたしは、自分にはとても真似できないが、人間として非常に優れた素晴らしい人（今の人も昔の人も、また日本の人も他の国の人でもよい）を知っており、尊敬の気持ちを持っています。
29. わたしは、自分がどんなに頑張っって努力をしていったとしても、結局のところ結果にそう大きな違いはないだろう、という気がしています。
30. わたしは、自分自身に遅かれ早かれ訪れる「死」に対して、心の準備が一応できており、そう恐ろしいとは思っていません。

これは、すでに梶田が 1988年に大阪府池田市と長野県松本市で小中学校に通う子供を持つ父親・母親を対象に行ったものとまったく同じものであり、ここでの分析もそれと比較しながら進めることにする(2)。

まず、学生の生き方意識の質問項目に対して、「はい」と回答した割合を見てみる。その回答結果を男女別に集計した(表6参照)。項目は、成人男性の集計結果において「はい」の割合が少なかったものから順に上にくるよう並べた。

表6 男女別生き方意識／「はい」の回答率(%)

項 目	男性	女性
5. 結局死ぬのだから努力は無駄	6.1	4.3
25. 自分の存在は無目的で無意味	10.9	6.3
27. 自分という幻影に拘泥せず	10.9	5.8
29. 頑張っても結果に変わりはない	6.3	5.8
16. 毎日の生活が灰色で嫌だ	43.6	41.4
12. 反対されると我慢できない	24.0	34.3
26. 大きな力にお任せして生きる	13.1	9.5
20. 善人が泣きを見ることもある	55.6	44.8
2. 自分を自己本位と思うことも	46.7	55.0
30. 自分の死にたいし心の準備あり	29.9	22.5
17. 自分を考えに入れると駄目	16.8	13.2
22. 自分を木石と見てやっていく	29.8	23.4
15. 誰も結局は金と快楽と名誉だ	27.9	13.2
10. 今楽しんでおこななくては損	35.6	42.0
7. 人間は誰も利己的な存在	37.8	33.0
8. 大きなチャンスが待っている	51.7	45.4
23. 生き方の手本となる人がいる	49.2	44.0
24. 無理をせずマイペースで	53.1	56.1
28. 優れた尊敬すべき人を持つ	61.1	51.8
18. 他人に役立つことをやりたい	45.8	58.6
4. 大きな可能性を実現させたい	69.8	77.4
1. 今のままの自分でいい	49.4	50.3
11. 人間として生まれたことに感謝	55.9	56.9
3. やるべき仕事・使命が必ず	50.0	43.2
13. いつも何かへのチャレンジを	67.6	74.4
6. 機会・条件に恵まれ私は幸せ	80.0	88.1
14. 成功よりとの時々頑張りを	54.7	58.1
9. その場の努力が大きな成果に	64.4	75.2
21. 周囲の人の支えでこの生活が	79.9	91.8
19. 自分の業績といえるものを	84.8	90.3

全体的な傾向を見ると、いくつかの項目においては、成人男性の結果と順位が大きく異なるものも見られるが、概して、上位のものは少なく、下の方にあるものは半数から大半の人が支持するように、成人男性と共通した傾向が見られる。「5. 結局死ぬのだから努力は無駄」や「25. 自分の存在は無目的で無意味」といったニヒリズムにかかわる意識は非常に薄く、これに対して「19. 自分の業績といえるものを」は、9割近くの人が「はい」と答え、



「29. 頑張っても結果に変わりはない」という逆転項目には、「はい」と答える人が非常に少ないなど、努力への意志や向上心にかかわる感覚・意識は強いといえる。

男女差をみると、成人の場合、男女で15%以上の差があった項目が6項目あったが、大学生の場合は1つもなく、また大学生の場合、成人で差が見られた17、8、24、13のうち、4を除いてはセル・カイの二乗値で見ても有意なほどの大きな差がみられなかった（セル・カイの二乗値は省略）。大学生で10%以上の差が見られたものは、12、20、15、18、9、21の6項目で、そのうち「20. 善人が泣きを見ることもある」と「15. 誰も結局は金と快楽と名誉だ」の2つは男性の方が強い意識である。成人においては男性の方が13、3、4、8などの積極的姿勢を強く示していたが、大学生においては男性がどちらかというと消極的姿勢を示していることが大きな違いである。

つぎに生き方意識に関する30項目のそれぞれ間の相関係数を求めた。成人の調査と比べると、全体に相関係数の値が低い。成人に比べて学生はまだ生き方意識の分化の程度が弱いためであろう。各質問項目の関連を簡略に示したのが、図1と図2である。図1は、男性の相関構造を大阪の成人男性の図に重ねて示したものである。大学生も成人男性も.3以上の関連を示した。両方ともに関連する場合は二重線で、大学生のみの場合は普通の線で、大阪の成人男性にのみ見られる関連の場合は破線で示した。図2は、女性の場合で、大阪の成人女性は.3以上の相関を示し、大学生の場合は.2以上の関連を示した。線の種類は、男性の場合と同じである。この図を見ると、男女とも成人の場合と基本的な構造は同じように見える。

図1の男性では、「4. 大きな可能性を実現させたい」、「8. 大きなチャンスが待っている」、「13. いつも何かへのチャレンジを」などの「自分の可能性の追求」という積極的意欲的な意識のあり方がひとつの核となっている。そしてもう一方では、「5. 結局死ぬのだから努力は無駄」と「25. 自分の存在は無目的で無意味」からなる「無意味感・無力感」と「7. 人間は誰も利己的な存在」、「15. 誰も結局は金と快楽と名誉だ」といった「シニシズム」的な意識が結びついている。このほかに「尊敬できる人がいる」と括られる「23. 生き方の手本となる人がいる」と「28. 優れた尊敬すべき人を持つ」の結びつきがある。これら「自分の可能性の追求」、「無意味感・無力感」、「シニシズム」、「尊敬できる人がいる」は、いずれも成人男性と共通する項目群である。異なる項目群は、「26. 大きな力にお任せして生きる」と「27. 自分という幻影に拘泥せず」の2つからなるもので、「自分へのこだわりのなさ」とでも括れるものである。

図2の女性では、男性の場合の「自分の可能性の追求」と「尊敬する人を持つ」の2つの項目群が1つに固まったような大きな群が見られる。しかし、成人女性の場合ほどこの結びつきは、強いものではない。「3. やるべき仕事・使命が必ず」と「4. 大きな可能性を実現させたい」と「8. 大きなチャンスが待っている」の3つは、それぞれ.3に近いかそれ以上の相関係数の値を示しており、また、「23. 生き方の手本となる人がいる」と「28. 優れた尊敬すべき人を持つ」の間は、.45ほどの相関係数の値を示しているが、両者をつなぐ、3と23、28の間の関連は、.2をわずかに上回る程度である。そこでとりあえず成人女性の場合に倣って、これらをひとまとめにして、「向上・達成への意欲」としておくが、男性のように「自分の可能性の追求」と「尊敬する人がいる」に分けた方がよいという可能性も高い。つぎに成人女性の図に重ねて共通することは、15と7の結びつきであり、これは、男性にも見られるパターンで男性に倣い「シニシズム」に関する項目としておく。成人女性に見られる項目群は、以上の2つのまとまりだけであるが、大学生女性の場合は、「5. 死ぬのだから努力は無駄」は「25. 自分の存在は無目的で無意味」の間の相関係数も.41と2番目に高い値を示している。また、5は、「29. 頑張っても結果に変わりはない」という項目とも弱いながらも関連がみられ、男性に見られた「無意味感・無力感」という固まりも見いだすことができる。つまり、成人女性の場合に比べて、男性のパターンにより近いといえるであろう。

さてつぎに以上の相関係数の分析をさらに因子分析の形に発展させてみよう。男女とも30項目全部を使って因子分析するには、相関の低い項目が多すぎるので、ここではひとつの試みとして、図1、図2に示した項目に限って因子分析を行うことにする。

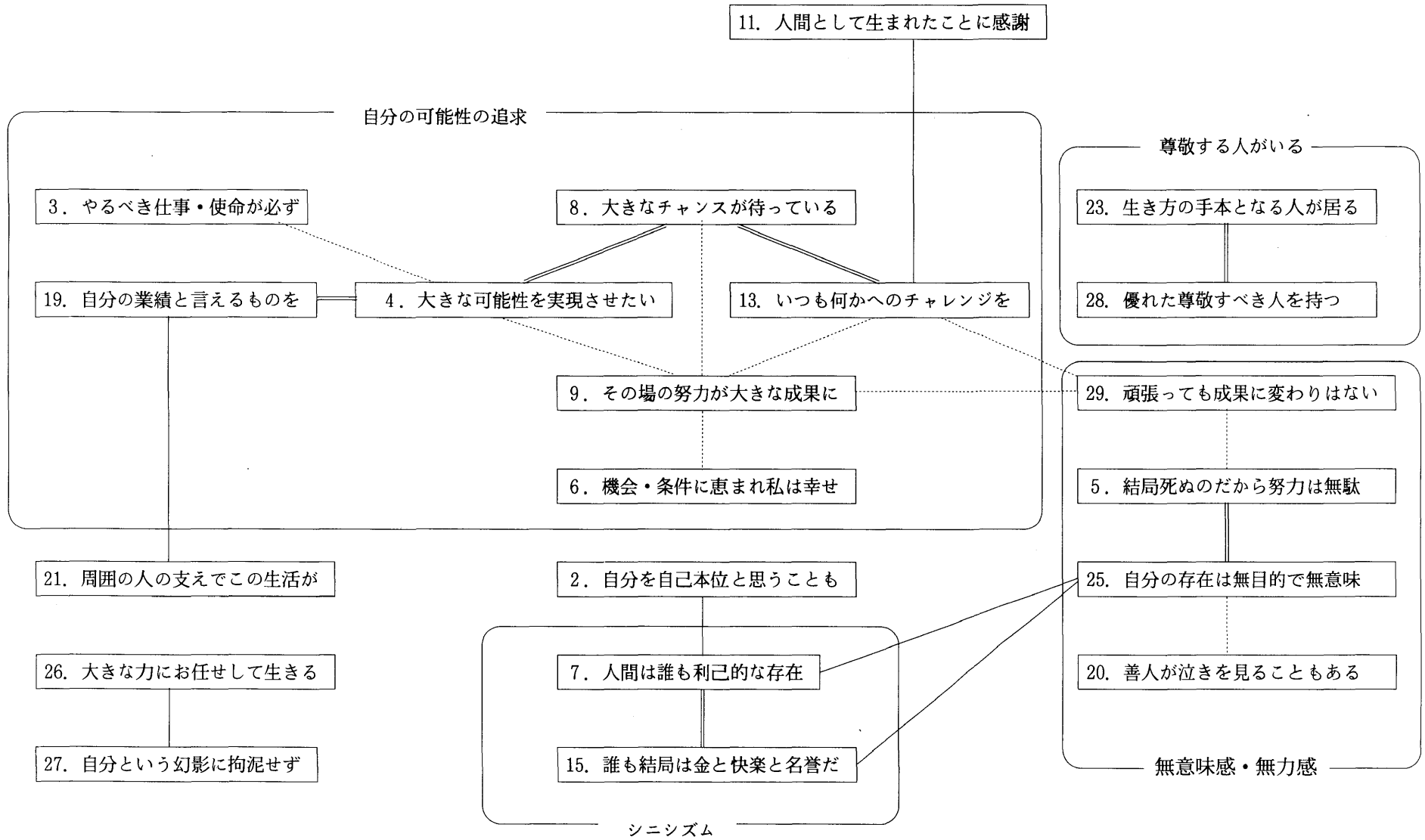


図1 男性の生き方意識（相関構造）

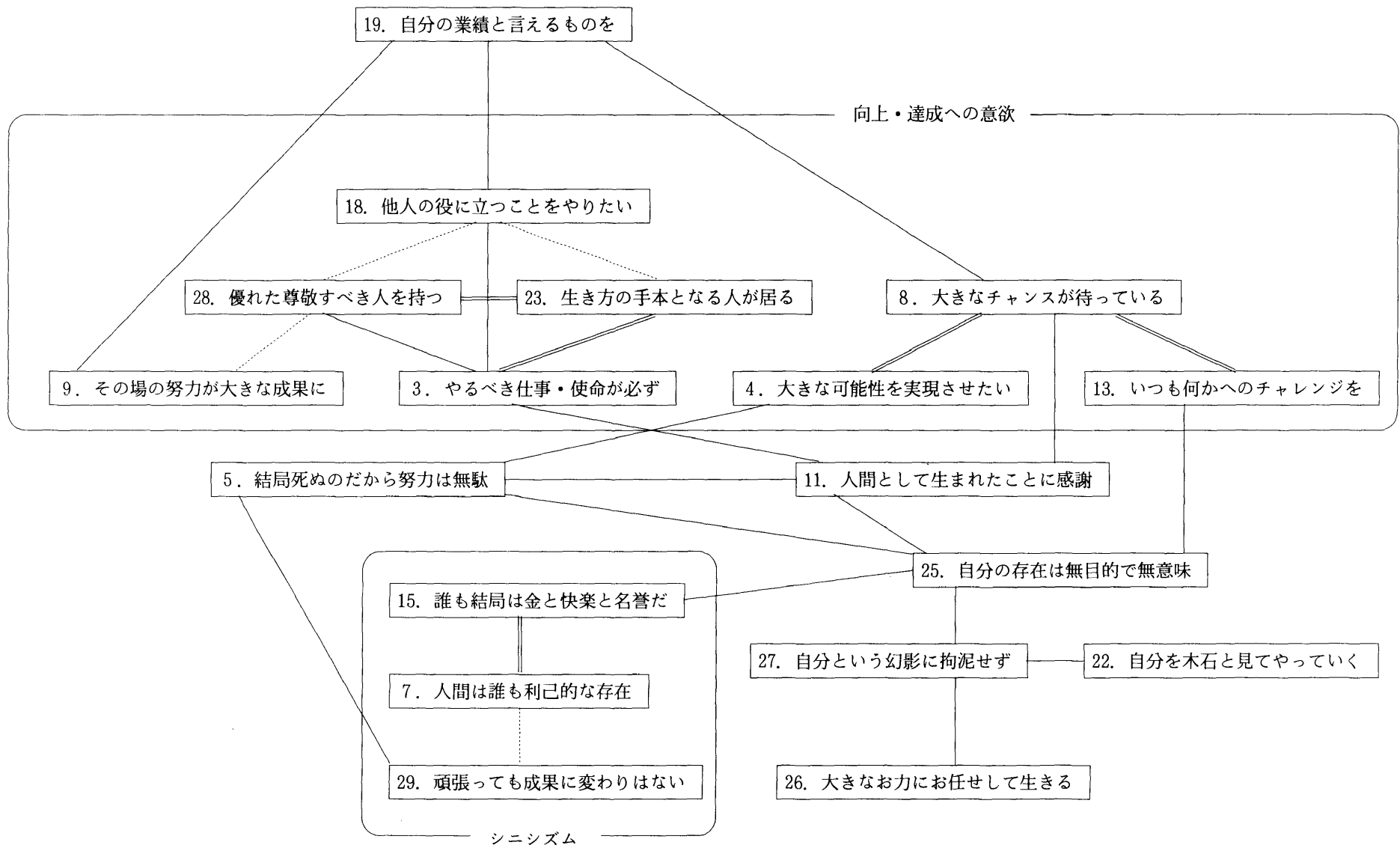


図2 女性の生き方意識（相関構造）

まず男性の場合であるが、分析に用いたのは15項目であり、主成分分析によって固有値1以上の因子が6因子抽出された。累積寄与率は、63.0%である。これをバリマックス回転した結果が表7である。

表7 因子分析の結果：男性の生き方意識

項 目	I シニシズム 的感覚	II 自己向上 意欲	III 自己実現 的姿勢	IV モデル的 人物志向	V 自己中心的 無目的	VI おまかせ	h <sup>2</sup>
2. 自分を自己本位と思うことも	.06509	.06322	-.10560	.19006	.88009	.02818	.83086
4. 大きな可能性を実現させたい	-.21960	.63822	.13201	.07239	-.03234	-.06813	.48391
5. 結局死ぬのだから努力は無駄	.34275	-.21201	.14209	-.27468	.54260	-.04701	.55468
7. 人間は誰も利己的な存在	.58970	.01568	-.30792	.08561	.27414	-.15202	.54840
8. 大きなチャンスが待っている	.09981	.31073	.48191	.18958	-.40722	-.06379	.54458
11. 人間として生まれたことに感謝	-.04882	.17467	.77278	-.02586	.06395	.12503	.65047
13. いつも何かへのチャレンジを	-.19987	.06266	.72823	.20856	-.07751	-.06071	.62738
15. 誰も結局は金と快楽と名誉だ	.83246	.00019	-.00055	.06603	-.10766	-.00245	.70895
19. 自分の業績といえるものを	.04736	.81416	.09289	-.04032	.01807	-.09026	.68383
21. 周囲の人の支えでこの生活が	-.01771	.67032	.08645	.16822	-.07545	.15160	.51408
23. 生き方の手本となる人がいる	.00842	.10334	.03009	.81883	.03926	-.00984	.68377
25. 自分の存在は無目的で無意味	.66239	-.22577	-.08775	-.11573	.24414	.21132	.61509
26. 大きな力にお任せして生きる	-.15153	.00683	.13670	.10310	-.11577	.77375	.66441
26. 自分という幻影に拘泥せず	.19716	-.01928	-.07996	-.02633	.13049	.79729	.69903
28. 優れた尊敬すべき人を持つ	.02072	.05555	.16217	.78164	-.00664	.07927	.64710
固 有 値 ( % )	3.01021 (20.1%)	1.76022 (11.7%)	1.40173 (9.3%)	1.18094 (7.9%)	1.07375 (7.2%)	1.02970 (6.9%)	9.45655 (63.0%)

これを成人の場合に倣って解釈していくと、第I因子は、「シニシズム的感覚」、第II因子は、「自己向上意欲」、第III因子は、「自己実現的姿勢」、第IV因子は、「モデル的人物志向」となる。第V因子と第VI因子は、成人の場合と少し異なる因子となっており、第V因子は、自己中心性と無目的の一部が重なったもので、「自己中心的・無目的」とし、第VI因子は、「おまかせ」と名付けておく。

女性の場合は、分析に用いたのは18項目で、主成分分析によって固有値1以上の因子が5因子抽出された。累積寄与率は、47.5%とあまりよい結果は得られなかった。これをバリマックス回転した結果は、表8である。これも成人の場合に倣って解釈していくと、第I因子は、「自己実現的姿勢」、第II因子は、「無目的・無意味感」、第IV因子は、「モデル的人物志向」、第V因子は、「シニシズム的感覚」となる。第III因子は、成人女性に倣うと「感謝の気持ち」となるものであるが、この因子には、その場での自分の努力と他に対して役立つことと漠然としたまわりへの感謝の3つの要素が含まれている。そこでこれを「まわりに生かされる自分」としておこう。

このように男女とも成人に見られた因子と共通する因子が見られ、また、男女でもかなり共通しているといえる。

表 8 因子分析の結果：女性の生き方意識

項 目	I 自己実現的姿勢	II 無目的無意味感	III まわりに生かされる自分	IV モデル的人物志向	V シニシズム的感覚	h <sup>2</sup>
3. やるべき仕事・使命が必ず	.56296	.08449	.21510	.34645	-.04210	.49214
4. 大きな可能性を実現させたい	.75361	-.06563	.07205	.05178	.03251	.58116
5. 結局死ぬのだから努力は無駄	-.18752	.60231	-.29970	.06156	-.05706	.49480
7. 人間は誰も利己的な存在	-.02536	.11719	-.06180	-.11221	.73334	.56858
8. 大きなチャンスが待っている	.68602	-.00495	.10702	.03185	-.04155	.48484
9. その場の努力が大きな成果に	.04321	-.37563	.43773	-.00496	-.06314	.33859
11. 人間として生まれたことに感謝	.14186	-.28314	.46208	.28841	.07695	.40292
13. いつも何かへのチャレンジを	.52552	-.20621	.02437	-.02890	.00982	.32022
15. 誰も結局は金と快樂と名誉だ	.01178	.02945	.00626	.04612	.84827	.72274
18. 他人に役立つことをやりたい	.12972	.02800	.62564	.14214	-.10254	.43976
19. 自分の業績といえるものを	.29606	-.03458	.47171	-.15329	-.08052	.34134
22. 自分を木石と見てやっっていく	.26697	.55077	.11311	-.14891	-.01047	.40970
23. 生き方の手本となる人がいる	.03450	.03808	.06800	.80604	.00495	.65698
25. 自分の存在は無目的で無意味	-.25633	.53283	-.30233	-.01548	.21177	.48610
26. 大きな力にお任せして生きる	-.06963	.34167	.55998	.01383	.14954	.45773
27. 自分という幻影に拘泥せず	-.08010	.61445	.20057	-.12249	.15643	.46367
28. 優れた尊敬すべき人を持つ	.07677	-.04879	.01442	.80359	-.08294	.66112
29. 頑張っても結果に変わりはない	-.05812	.45733	.00347	.10377	.01169	.22344
固 有 値 ( % )	2.95555 (16.4%)	1.80027 (10.0%)	1.48077 (8.2%)	1.21488 (6.7%)	1.09435 (6.1%)	8.54582 (47.5%)

#### 4. 満足、不満と生き方意識

最後に生き方意識と学生の講義・演習等に対する満足・不満の関連を見てみよう。

2節で見たように男子学生は、1.2の自分の将来に役立つことを満足として挙げるのが女子学生よりも多く、逆に女子学生は、2の学問・研究に目覚めるを挙げるが多かった。また不満では、男子学生は、9.1の人間・人間関係の不満を挙げる率が高く、女子学生は、9.2の講義等における不満を挙げる傾向があった。そこでこれら4つの項目に絞り、生き方意識との関連をみている。

生き方意識の因子分析によって抽出された因子の因子得点を計算し、男女別に満足や不満の項目のあり、なしによってt検定をした結果が、表9と10である。生き方意識の各質問項目は、「はい」と答えたものには、1、「どちらともいえない」と答えたものには、2、「いいえ」と答えたものには3の値を与えているため、各因子が表す概念に肯定的なものほど因子得点は低くなるようになっている。

まず男性の表9から見ると、表9-1から1.2の大学の講義・演習等が自分の将来に役立つという満足を述べたものは、「自己向上意欲」の因子得点が低いので、自己向上意欲が高いと解釈できる。表9-2からは、教官の人間的な面、あるいは教官と学生の人間関係における不満を述べたものは、モデル的人物志向性が高い。教官にも尊敬できる人物像であってほしいと求めているといえよう。さらにそのような不満を述べるものは、表9-3から、自己中心的・無目的であるとわかる。とくに利己的、自己中心的な性格が、教官の人間性の否定的側面を指摘するのであろうか。また、表9-4からは、講義や演習などにおけるつまらなさ、難解さ、手際の悪さに対する不満を持つものは、自己中心的、無目的な傾向が少ないことがわかる。おそらくこれは、目的意識の強さが関係することであろう。

表9 満足・不満と生き方意識の関連（男性）

表9-1 「1.2 自分の将来に役立つ」と「自己向上意欲」

1.2 自分の将来に役立つ	ケース数	平均	標準偏差
なし	109	.0901	1.080
あり	35	-.2834	.587

t 値 2.61 df=107.9 p<.05

表9-2 「9.1 人間・人間関係における不満」と「モデル的人物志向」

9.1 人間・人間関係	ケース数	平均	標準偏差
なし	92	.0711	1.024
あり	22	-.4112	.731

t 値 2.55 df=43.13 p<.05

表9-3 「9.1 人間・人間関係における不満」と「自己中心的・無目的」

9.1 人間・人間関係	ケース数	平均	標準偏差
なし	92	.0112	.929
あり	22	-.4769	.871

t 値 2.24 df=112 p<.05

表9-4 「9.2 講義等における不満」と「自己中心的・無目的」

9.1 講義における不満	ケース数	平均	標準偏差
なし	81	-.2053	.965
あり	33	.2172	.789

t 値 -2.23 df=112 p<.05

続いて女性の表10からは、2の学問・研究に目覚めたという満足を述べたものは、シニシズム的感覚が弱い。学問的世界というある意味では特異な価値体系に対しても懐疑的、無関心にならず、興味を持つためであろう。また、9.1の人間・人間関係に対する不満を持つものは、表10-2より、まわりに生かされる自分という意識が強い。このような人にとっては、教官との人間関係にも不満を抱きやすいこともよく理解されよう。さらに、表10-3においては、人間・人間関係に不満を持つ人は、モデル的人物志向性が弱いことがわかる。これは、男性においてはこの不満を持つ人は、モデル的人物志向性が強かったのと反対である。女性においては、モデル的人物を持っていないために教官にそのモデルを求めた結果、不満を抱くのであろう。

表10 満足・不満と生き方意識の関連（女性）

表10-1 「2 学問・研究に目覚める」と「シニシズム的感覚」

2 学問・研究に目覚める	ケース数	平均	標準偏差
なし	160	-.0866	1.032
あり	218	.1509	.948

t 値 -2.34 df=376 p<.05

表10-2 「9.1 人間・人間関係における不満」と「まわりに生かされる自分」

9.1 人間・人間関係	ケース数	平均	標準偏差
なし	262	.0388	.988
あり	35	-.4199	1.012

t 値 2.57 df=295 p<.05

表10-3 「9.1 人間・人間関係における不満」と「モデル的人物志向」

9.1 人間・人間関係	ケース数	平均	標準偏差
なし	262	-.0449	.969
あり	35	.3466	.928

t 値 -2.28 df=295 p<.05

そのほかにも男女で同じような因子が抽出されているが、ここに挙げなかったものは、満足、不満と関連が見られない。つまり、生き方意識と性別との両方が満足、不満に影響を与えているのであろう。

#### 注

- (1) 自由回答から導き出された以下の1から9までのカテゴリーは、すでに発表されている、梶田叡一、1995年、「大学生は講義・演習等の何に満足し、何に不満なのか」『京都大学高等教育研究』第1号、54-58頁  
に用いられているものと基本的には同じである。ただし、本論ではカテゴリーごとに数量化して分析を進めていくため、細かいサブカテゴリーは最小限にとどめた。そのため、梶田の用いた2から5までのサブカテゴリーは本論では用いず、9のサブカテゴリーも統合して用いている。
- (2) 池田市と松本市の調査の結果については、梶田叡一、1990、『生き方の心理学』有斐閣、158-174頁を参照。